



Title	スタール夫人とシャトーブリアン : 『文学論』をめぐって
Author(s)	植村, 実江
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 49-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スタール夫人とシャトーブリアン ——『文学論』をめぐる——

植村 実江

スタール夫人とシャトーブリアンは、ともにロマン主義の先駆者として文学史に名を残している。この二人が固い友情で結ばれていたことは、シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』からも広く知られている。ところが、二人の作家の出会いはいは友好的なものではなく、一方が他方を攻撃する形となった。

スタール夫人が1800年に発表した『文学論¹⁾』は、文壇に多大な論争を巻き起こした。この作品は、ギリシャ・ローマ以来の西洋文学を概観し、文学と気候風土、さらには政治形態との関係を明らかにするという壮大な計画によるもので、「人類の無限進歩説」の擁護と、共和国にふさわしい理想の文学を世に提示することを目的としていた。

知の蓄積によって文明が着実に進歩するという「進歩説」の概念を唱えることで、『文学論』は、一部の人々から猛烈な反発を受ける。フランス革命勃発の1789年から10年を経た1799年11月、総裁政府を倒したナポレオンが自ら第一執政となって執政政府を樹立し、フランスは新しい時代を迎えようとしていた。恐怖政治(1792-1794)の生々しい記憶が冷めやらぬ当時、知識人の大部分にとって、フランス革命は負の遺産であった。そして、革命を全面否定する考えが多勢を占め、18世紀の啓蒙思想にその責を負わせる論調が現れていた。「進歩説」は、18世紀啓蒙思想家たちの大部分が共有していた概念であり、革命と啓蒙思想を結び付ける人々にとっては、憎むべき思想となっていたのだ。

『文学論』の攻撃の先鋒に立ったのが、ルイ・ド・フォンターヌである。スタール夫人より9歳年長の文筆家である彼は、自身が編集を任されていた『メルキユール・ド・フランス』誌(以下『メルキユール』)において、『文学論』を批判する記事を二回にわたって掲載する²⁾。革命と恐怖政治を結び付ける革命否定論者とは異なり、スタール夫人は、恐怖政治は偶発的に起こってしまったもので、革命の原理自体は否定されるべきではないという信念をもっていた。従って、革命と恐

1) Mme de Staël, *De la Littérature considérée dans ses Rapports avec les Institutions sociales*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2017 (以下、*De la Littérature*)。『文学論』において、「文学」は「自然科学を除く、すべての哲学的な著作と、想像による作品」を指す(*De la Littérature*, Discours préliminaire, p. 14)。

2) シャトーブリアンは『メルキユール』掲載時、脚注で「三回」と書いているが、近い時期に掲載された、ネッケル批判の記事も含めていると考えられる(François René de Chateaubriand, *Lettre à M. de Fontanes, Essai sur les Révolutions — Génie du Christianisme*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1978, p. 1953, Notes et variantes)。《*Lettre à M. de Fontanes*》は、以下《*Lettre*》と略す。

怖政治を切り離すことが、スタール夫人にとって重要な課題であった。総裁政府の時期にスタール夫人は政界を裏で操る「女策士 *intrigante*」と呼ばれ、しばしばメディアの標的となった。スタール夫人をスキャンダルの餌食とした文筆家の一人がフォンターヌである。彼は、革命という一連のプロセスに不可欠な要素として、恐怖政治が内包されていると考えていた。この論理に従うと、恐怖政治に対する憎悪はそのまま、革命自体に向けられることになる。このような因縁をもつフォンターヌからの辛辣な批判に対し、スタール夫人は初版から半年ほど後の1800年11月に『文学論』第二版を発表し、そこに加筆した序文と注において、全面的にフォンターヌに反論する。

『文学論』第二版の発表から間もない12月22日に、新版を批判する記事が再び『メルキュール』に掲載される。『フォンターヌ氏への手紙、スタール夫人の著作「文学論」第二版について』と題されたこの記事は、「『キリスト教精髄』の著者」という謎の人物が、親しい友人であるフォンターヌに語りかけるスタイルをとっている。フォンターヌに反論する『文学論』第二版をふまえ、彼に援護射撃を送るこの記事こそ、シャトーブリアンが後に「この記事のおかげで日の目を見ることができた³⁾」と、告白する記事であった。

『文学論』Flammarion版の校訂者(G rard Gengembre, Jean Goldzink)も指摘する通り⁴⁾、フォンターヌからシャトーブリアンへと続く一連のスタール夫人への攻撃は、『キリスト教精髄』の出版に向けてのプロモーションの側面があった。イギリス亡命時代にシャトーブリアンと親しくなったフォンターヌは、この若い青年こそが、自分たちの世代の最後の大作家になると確信していた。4月に発表された『文学論』はすでに文学界で大いに注目されていた。話題の作品の批判の場を利用して、フォンターヌは「類似のテーマを扱った未発表の作品⁵⁾」を宣伝する。

スタール夫人がこの時期にあえて、論争を引き起こす問題作を世に出した真意を探るためには、作品の時代背景の精査が不可欠である。このような観点から、本稿は、『フォンターヌ氏への手紙』でスタール夫人の理論をシャトーブリアンがどのように批判したのか明らかにするとともに、『文学論』に対する一連の論争の経緯を検証し、二人の作家の対立の全容を明らかにすることをめざして考察をすすめる。

1. 人類の無限進歩説

シャトーブリアン研究の泰斗であるJean-Claude Berchetによると、シャトーブリアンの記事は、フォンターヌによる議論の焼き直しであり、特に目新しいことは何も提示されていない⁶⁾。しかしながら、『フォンターヌ氏への手紙』は、いくつ

3) Chateaubriand, *M moires d'outre-tombe* I, Gallimard, Biblioth que de la Pl iade, 1951, p. 444 (以下、*M moires*)。

4) Mme de Sta l, *De la Litt rature*, GF Flammarion, 1991, p. 44.

5) Louis de Fontanes, *De la Litt rature par Mme de Sta l-Holstein, Œuvres de M. de Fontanes*, Tome seconde, Chez L. Hachette, 1856, p. 204.

6) «De sa Lettre au Citoyen Fontanes sur la seconde  dition de [...] Mme de Sta l qui relan ait la pol mique du printemps sans apporter rien de tr s nouveau», Jean-Claude Berchet,

かの好意的な批評に迎えられた。作品には彼の才能の片鱗が十分現れていた。キリスト教と情念に関する深い洞察や理想美についての論述の他、例えば、『フォンターヌ氏への手紙』はアメリカ・インディアンの民話風のエピソードで終わるが、この入れ子構造の挿話には、後の作品の人気の秘訣となる「*onirique*」な要素が垣間見える。『文学論』の批判としては付け加えるべき点がないにせよ、文章には独創性が示されており、批評家の目を引いたのだ。さらに、『文学論』批判という面で、必ずしもフォンターヌと同意見ではない部分も散見される。

シャトーブリアンは『フォンターヌ氏への手紙』の一年半後に『キリスト教精髄』を発表する。この作品における彼のねらいは、19世紀のパスカルとなることであった。18世紀の啓蒙思想は「進歩説」とともに「キリスト教否定」とも直結する。革命の間にキリスト教は完全に失墜し、1800年代初頭には、大衆に襲撃された教会が廃墟となって打ち捨てられていた。シャトーブリアンは『キリスト教精髄』を通して、旧体制の崩壊によって精神的な基盤を失った人々に、キリスト教の信仰を取り戻し、心の拠り所とすることを呼びかける。この基本的な姿勢は『フォンターヌ氏への手紙』ですでにとられている。スタール夫人は、知の増大に応じて人間精神も向上すると考えており、これは彼女が「進歩説」を信奉する根拠であった。これに対し、シャトーブリアンは科学が進歩しても精神の向上に繋がることはないと断言している⁷⁾。シャトーブリアンの考えでは、不幸な人間を「進歩説」は救ってくれない。傷ついた人民を救うのは、信仰のみであるという主張が、『フォンターヌ氏への手紙』においても強調される。

J'ai le malheur de croire, avec Pascal, que la religion chrétienne a seule expliqué le problème de l'homme⁸⁾.

作品の終盤では、「スタール夫人にもし出会えたら、このように言うだろう」として、以下のように語りかける。

[...] l'érudition ne satisfait pas, et le cœur surtout est trop sacrifié à la pensée. D'où proviennent ces défauts ? de votre philosophie. C'est la partie éloquante qui manque essentiellement à votre ouvrage. Or, il n'y a point d'éloquence sans religion. L'homme a tellement besoin d'une éternité d'espérance, que vous avez été obligée de vous en former une sur la terre par votre système de *perfectibilité*, pour remplacer cet *infini*, que vous refusez de voir dans le ciel. Si vous êtes sensible à la renommée, revenez aux idées religieuses⁹⁾.

この文章には、信仰を捨ててしまったフィロゾフたちに対する批判が読み取れる。

Chateaubriand, Gallimard, 2012, p. 323.

7) «Le genre humain a-t-il fait un pas dans les sciences morales : non ;», *Lettre*, p. 1268.

8) *Ibid.*, p. 1266.

9) *Ibid.*, pp. 1278-1279.

そして革命については直接書かれていないものの、抑制された文章の裏に、フィロゾフに対する叱責の念が隠されているように思われる。これはスタール夫人への個人攻撃でなく、人類への呼びかけである。シャトーブリアンは、スタール夫人が提唱した「進歩説」ではなく、「永遠性」を約束してくれるキリスト教こそ、新しい文学にふさわしい要素であると唱えた。このような文章は、政治的なフォンターヌ擁護というよりも、『キリスト教精髓』の先取りという様相をこの作品に与えている。

2. 「北の文学の優越性」と『オシアン』について

スタール夫人は「南の文学」と「北の文学」の始祖として、それぞれをホメロスとオシアンであるとした。そして、北の人々の精神性が生み出す「メランコリー」を特徴とする「北の文学」を、共和国にふさわしい文学として称揚した。このようなスタール夫人の主張に対するフォンターヌの批判を振り返ると、彼の批判は二点に絞られる。まず、スタール夫人が近代的な文学とする「北の文学」より、ギリシャ・ローマの「南の文学」、すなわち「古代の文学」のほうが優れているという点である。実際、19世紀初頭には、古典文学の優雅さに比べると、「北の文学」は粗野であるにとらえる人々が多く存在した¹⁰⁾。第二のポイントは、『オシアン』を南のホメロスに匹敵する「北の文学」の源泉であるとする定義への批判である。18世紀後半にイギリスで紹介されたばかりの『オシアン』に「古代性」は認められず、『オシアン』を源流とする「北の文学」という定義は意味をなさないというのがフォンターヌの主張であった。*Ossian en France*の著者であるVan Tieghemは『文学論』の発表後、もっとも批判が集中したのが「オシアンの章」であると指摘している¹¹⁾。『オシアン』はスコットランドの作家マクファーソンが、「古代ゲール語の英雄譚を採集したもの」という触れ込みで、1760年に刊行を開始し、以後ヨーロッパで大変な成功をおさめた。高い人気を誇る一方、編纂者であるマクファーソンの創作ではないかという疑惑が持ち上がっていた¹²⁾。フォンターヌはマクファーソンの創作ではなく本物の古い叙事詩であると信じていた。その根拠として「もしマクファーソンがヨーロッパの人々を騙そうと考えたのなら、すでに知られている粗野な詩を模倣したであろう。しかし『オシアン』に見

10) フォンターヌと同じく古代文学を範とするアンドレ・シュニエ (1762-94) は、「北の詩人」をギリシャ人と比して「野蛮」「極端に悲観的」と評し、このように書いている。「Leurs [= des Grecs] expressions sont vraies, humaines, nées dans l'homme et doivent toucher tous les hommes. Ce ne sont (pas) là de ces convulsions barbares de Shakespeare, de ces expressions monstrueuses et tirées on ne sait d'où, de ces idées énormes et gigantesques qui, dans les poètes du Nord, fatiguent et rembrunissent l'âme sans la toucher [...] la plupart de ces poètes du Nord, surtout Anglais, se tourmentent toujours et en toute occasion ; leur douleur est un désespoir frénétique ; » (André Chénier, *Essai sur les Causes et les Effets de la Perfection et de la Décadence des Lettres et des Arts, Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, pp. 646-647).

11) Van Tieghem, *Ossian en France*, Tome second, F. Rieder, 1917, p. 215.

12) 現在は、マクファーソンが採集したスコットランド・ゲール語のバラードをもとに、かなりの脚色と、自身の創作を加えたものであると見られている。

出されるのは全く見たこともない概念である¹³⁾」と説明していた。フォンターヌはまた、ホメロスに見出される美しさが、『オシアン』には微塵も見出せないと酷評している。

実は、この『オシアン』の解釈に、フォンターヌとシャトーブリアンの間で決定的な違いがある。フォンターヌとは対照的に、シャトーブリアンは、マクファーソンの創作説を主張する。彼は、マクファーソンにいまだに騙されているのは、外国人（英国人以外）だけだと言う。シャトーブリアンは若い頃、『オシアン』の熱狂的な愛読者であった。しかし何年か英国に滞在し、文学者と接するうちに、彼が抱いていた「オシアン幻想」は打ち砕かれた。また、マクファーソンとその出版社が発見したと主張する「オシアンの草稿」はでっちあげで、マクファーソンの草稿をスコットランド語に翻訳したものであると糾弾する。

『オシアン』が古代の詩であるというロマンは崩壊したものの、シャトーブリアンは『オシアン』を愛読し続けた。そして「北の叙事詩人たちはみな、オシアンという泉で、メランコリーに酔いしれた」というスタール夫人の説に、大賛成だと言う¹⁴⁾。つまり、シャトーブリアンは『オシアン』の古代性を否定するものの、その文学的評価においてはフォンターヌと対立し、スタール夫人と好みが似ていることを告白しているのだ。ここで両者の仲を取りもつのは「メランコリー」である。さらに、「あなた [= フォンターヌ] は驚くかもしれないが、オシアンはキリスト教徒なのです」と持論を語り始める。シャトーブリアンによると『オシアン』に登場する英雄たちの高い徳は、キリスト教の教えが促す、文明化された社会に見られるものである。また、いくつかの詩の中には、聖書を模倣したものさえあると言う。このように、シャトーブリアンは、スタール夫人の考えに共感する部分もあることを明かしている。スタール夫人は『『オシアン』に見出される心の動きはキリスト教の精神に近い¹⁵⁾』と述べており、両者の考えがときに接近する様子が確認できる。

3. 「メランコリー」と新しい文学

スタール夫人は「北の文学」に見られる「メランコリー」を称揚した。以下は、『文学論』においてメランコリーを描いた箇所として代表的な一節である。

Les poètes anglais qui ont succédé aux bardes écossais, [...] ont conservé l'imagination du Nord, celle qui se plaît sur le bord de la mer, au bruit des vents, dans les bruyères sauvages ; celle enfin qui porte vers l'avenir, vers un autre monde, l'âme fatiguée de sa destinée. L'imagination des hommes du Nord s'élance au-delà de cette terre dont ils habitaient les confins ; elle s'élance à travers les nuages qui bordent leur horizon, et semblent représenter l'obscur

13) Louis de Fontanes, *op. cit.*, p. 200.

14) *Lettre*, pp. 1272-1273.

15) *De la Littérature*, p. 131.

passage de la vie à l'éternité¹⁶⁾.

北の人々はこの世の果てに住んでおり、死の世界との境界は彼らのすぐそばに位置している。従って、北の人々は死を身近に感じる世界観をもっている。北の人々の想像力は、疲れ切った魂を来世へと運ぶ。別の箇所ですタル夫人は、消耗した魂は常に、憧憬の念をもって死へと進んでいくと説明している。この状態がロマン主義的な「夢想」であり、メランコリーの感情と強く結び付く。メランコリーは、夢想の状態に耽溺する「病める魂」に靈感を与え、優れた芸術作品の源泉となる。スタール夫人は『文学論』でこのようなロマン主義の天才像を描き、「北の文学の優越性」を主張した¹⁷⁾。

また、『コリヌスあるいはイタリア』に見られるように、スタール夫人は南の文学＝色鮮やか、北の文学＝陰鬱という二項対立も提示している。ロマン主義の潮流の中で、見る者の目に映る風景と、内面に描かれる心象風景はますます同化してゆく。北の無彩色の風景がよりメランコリーの心情と調和することを、スタール夫人は『文学論』で早くも予言している。

メランコリーを「北の文学」の特徴だとするスタール夫人の主張を、シャトーブリアンは否定し、以下のように説明する。

Comme au temps du déluge les hommes se sauvèrent sur le sommet des montagnes, emportant avec eux les débris des arts et de la civilisation. Les solitudes se remplirent d'anachorètes qui, vêtus de feuilles de palmier, se dévouaient à des pénitences sans fin, pour fléchir la colère céleste. De toutes parts s'élevèrent des couvents, où se retirèrent des malheureux trompés par le monde, et des âmes qui aimaient mieux ignorer certains sentiments de l'existence, que de s'exposer à les voir cruellement trahis. Une prodigieuse mélancolie dut être le fruit de cette vie monastique ; car la mélancolie s'engendre du vague des passions, lorsque ces passions, sans objet, se consomment d'elles-mêmes dans un cœur solitaire¹⁸⁾.

シャトーブリアンにとって「メランコリー」とは、確固とした形をもたない情念が孤独のうちでそれ自体によって消耗されることである。この精神活動を、情念から距離をおき、静謐な修道生活に身を捧げる孤独な修道士のイメージと重ねて描写している。下線部の「le vague des passions」について、シャトーブリアンは『キリスト教精髓』において一章を割いており（Deuxième Partie, Livre III, Chapitre IX）、この概念はロマン主義の病める魂の顕著な特徴となる。この章では、

16) *Ibid.*, p. 129.

17) 拙論を参照のこと。「スタール夫人における北の文学とメランコリー」『ガリア』第58号、2019年、39-48頁。

18) *Lettre*, pp. 1271-1272（下線は論者による）。

「文明化が進めば進むほど、情念の空漠の状態は増大する¹⁹⁾」と述べられており、「メランコリーは概して近代的な感情である」というスタール夫人と、近い考えが示されている。『フォンターヌ氏への手紙』でシャトーブリアンは「天才に特定の時代はない。天才は昔からみなメランコリックである²⁰⁾」と述べているが、スタール夫人と同様、「近代的なメランコリー」という概念の形成の一端を担っていたこともたしかである²¹⁾。

シャトーブリアンはさらに、スタール夫人の「北の文学、南の文学」という文学理論を論破しようとする。

Enfin les monastères étaient bâtis dans les sites les plus sauvages : on les trouvait dispersés sur les cimes du Liban, au milieu des sables de l'Égypte, dans l'épaisseur des forêts des Gaules, et sur les grèves des mers britanniques²²⁾.

ここでは、北の風土の荒涼とした風景とメランコリーを結び付ける、スタール夫人の理論との対比が強調されている。「les monastères」はメランコリーを生み出す場を象徴しており、四つの土地（レバノン、エジプト、ガリア、イギリス）は東西南北を表していると考えられる。各地に散らばる「les monastères」は、メランコリーが特定の気候風土とは関係なく生み出されることを意味し、メランコリーを「北」と結び付けるスタール夫人の考えを否定している。彼はさらに、メランコリーとキリスト教の結び付きを強調する。

Oh ! comme ils devaient être tristes, les tintements de la cloche religieuse qui, dans le calme des nuits, appelaient les vestales aux veilles et aux prières, et se mêlent, sous les voûtes du temple, aux derniers sons des cantiques et aux faibles bruissements des flots lointains ! Combien elles étaient profondes les méditations du Solitaire qui, à travers les barreaux de sa fenêtre, rêvait à l'aspect de la mer, peut-être agitée par l'orage ! la tempête sur les flots ! le calme dans sa retraite ! des hommes brisés sur des écueils au pied de l'asile de la paix ! l'infini de l'autre côté du mur d'une cellule, de même qu'il n'y a que la pierre du tombeau entre l'éternité et la vie ! ... Toutes ces diverses puissances du malheur, de la religion, des souvenirs, des mœurs, des scènes de la nature, se réunirent pour faire, du génie chrétien, le génie même de la mélancolie²³⁾.

この文に見られる「profonde méditation」という語は、「réflexion profonde」と同

19) *Génie du Christianisme*, p. 714.

20) *Lettre*, p. 1276, note A.

21) シャトーブリアンがメランコリーを近代的なものとみなしていたことは、Didier も指摘している（Béatrice Didier, *Corrine ou Italie de Mme de Staël*, Folio, 1999, p. 130）。

22) *Lettre*, p. 1272.

23) *Ibid.*, p. 1272.

様ロマン主義のキーワードであり、ロマン主義を象徴するテーマである「苦悩する青年像」を形成する一要素となる。これらの語彙はスタール夫人が『文学論』の中で「北の文学」を説明するためにすでに使用している²⁴⁾。また、メランコリーとキリスト教精神の親和性についても、スタール夫人は指摘している²⁵⁾。

以上のように、メランコリーとキリスト教の要素が結び付けられるとき、シャトーブリアンとスタール夫人の考えに重なる部分が見出される。「スタール夫人がメランコリーをキリスト教に帰すとき、私は彼女に大いに賛同する²⁶⁾」とシャトーブリアンが書いているように、ここに「メランコリーの称揚」という両者の共通点が浮かび上がる。

4. 『文学論』批判の背景とその後

『フォンターヌ氏への手紙』の一部は、のちに『キリスト教精髓』にそのまま利用される。シャトーブリアンは、ローマ法王との和解をはかるコンコルダートの記念式典の四日前（1802年4月14日）に、満を持して『キリスト教精髓』を発表する。カトリック復権の気運が高まる中、『キリスト教精髓』は称賛をもって迎えられる。このように、シャトーブリアンは『フォンターヌ氏への手紙』を通して、自らが新しい文学の提唱者となるための作品『キリスト教精髓』を世に送る準備を固めた。

二人の作家の関係は、スタール夫人の『文学論』に対するシャトーブリアンによる辛辣な攻撃から始まった。しかしながらこのことは、個人的な恨みなどではなく、両者がたまたま政治的に敵対する立場に置かれていたためである。1800年5月の帰国当時、シャトーブリアンの名はまだ亡命者リストにのっており、そこからの削除には、ナポレオンに好印象を与えることも必要であった。フォンターヌはロンドン時代の友人に惜しみなく手を貸した。ナポレオン側の新聞の中心人物として、すでに側近のような立場を確保していた友人の支えは、シャトーブリアンにとって貴重であった。シャトーブリアンがフォンターヌに恩義を感じていたことは確実であり、スタール夫人の攻撃に乗じて『キリスト教精髓』のプロモーションを行う計画を持ち掛けられたとき、選択の余地はなかっただろう。

フォンターヌの意向に沿って攻撃に加担するも、わずか半年ほどの間に彼は態

24) *De la Littérature*, p. 129.

25) «on y [= dans Ossian] retrouve sans cesse une élévation d'âme, un respect pour les morts, une confiance dans une existence à venir ; sentiments beaucoup plus analogues au caractère du christianisme que le paganisme du Midi.» (*Ibid.*, p. 131) 「メランコリーとキリスト教の親和性」に関して、スタール夫人は特にカトリシズムに限定していない。一方、カトリシズムへの復帰はロマン主義の主要な特徴の一つである。プロテスタンティズムではなくカトリシズムに回帰する傾向には、様々な原因が考えられる。ゲーテは、プロテスタンティズムには告解室がないので個人が重荷をすべて自分で背負わなければならないと述べている。また、プロテスタントの建造物や象徴に美的側面が乏しく、視覚的印象が希薄である点が挙げられる（H. G. シェンク、生松敬三、塚本明子訳『ロマン主義の精神』みすず書房、1975年、122-123頁）。シャトーブリアンは後に、ユゴーに先駆けて、壮大な中世の大聖堂を描写し、ネオ・ゴシックの潮流を生み出した。ゴシック・リバイバルとも呼ばれるこの運動は、各ヨーロッパ人の、中世にアイデンティティを求める国民意識を反映していると言われる。

26) *Lettre*, p. 1271.

度を翻す。シャトーブリアンが1801年4月に出版した『アタラ』は多大な人気を博した。1800年5月の帰国以来、亡命貴族として言わば身を隠していた彼は、作品の成功で脚光を浴び、表に出ざるを得なくなる。シャトーブリアンは「亡命貴族軍に加わっていた」という過去を払拭し、身の潔白を証明する必要に迫られる。折しも、当局により「党派精神」が批判され、『メルキュール』による作品の宣伝という事実はマイナスイメージになる可能性が生じてきた²⁷⁾。そこでシャトーブリアンは、スタール夫人との和解を試みる。彼は『アタラ』の第二版の序文で、スタール夫人に謝罪し休戦を申し出る。「自分がかねてから尊敬を惜しまない人物[フォンターヌのこと]に向けられた砲撃を跳ね返そうとしたに過ぎない²⁸⁾」と弁明し、「スタール夫人のように聡明で才気に富んだ人なら、私のような、孤独で無名の者による小さな一撃など、水に流して下さるだろう²⁹⁾」と、謙遜を交えた誉め言葉を贈っている。彼の謝罪を、スタール夫人は快く受け入れた。彼女にとって、この和解が打算的なものではなかったことが、スタール夫人の書簡から窺われる。『アタラ』をたいそう気に入ったスタール夫人は、新たな才能を称賛し、周りにも彼の作品を勧めている³⁰⁾。また、シャトーブリアンもスタール夫人に「自らに匹敵する」才能を認めていた³¹⁾ことは、付け加えておくべきだろう。『フォンターヌ氏への手紙』の終盤には、スタール夫人に語りかける場面がある。

Je suis convaincu que vous avez en vous le germe d'un ouvrage beaucoup plus beau que tous ceux que vous nous avez donnés jusqu'à présent. [...] si vous demeurez dans vos opinions, vous ne parviendrez point à la hauteur où vous pouviez atteindre, en suivant la route qui a conduit Pascal, Bossuet et Racine à l'immoralité³²⁾.

パスカル、ボシュエはシャトーブリアンにとってメランコリーの大家である。二人を引き合いに出すこれらの言葉は、自尊心の高いシャトーブリアンなりの最大限の賛辞であり、スタール夫人への尊敬の念の表れと言えるだろう。同年5月には和解の食事が催される。しばらくしてスタール夫人はパリを発ち、二人の作家の文通が始まる。

27) 『アタラ』の成功とスタール夫人との和解に関する経緯は、Berchetに詳しい。「[...] il fallait faire oublier ce que la promotion de son [= de Chateaubriand] ouvrage devait au *Mercur*, c'est-à-dire à un "esprit de parti" qui, en ce printemps de 1801, avait mauvaise presse auprès du pouvoir», Berchet, *op. cit.*, p. 333.

28) シャトーブリアンは『墓の彼方からの回想』において、「フォンターヌはスタール夫人に対してすこぶる痛烈であった」と語り、自らの攻撃は棚に上げている (*Mémoires*, p. 389)。

29) Chateaubriand, *Atala, Œuvres Romanesques et Voyages*, Tome I, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1969, p. 22.

30) Joseph Napoléon 宛の手紙 (Mme de Staël, *Correspondance Générale*, Tome IV, Champion-Slatkine, 2009, p. 364)。

31) Berchet, *op. cit.*, p. 333.

32) *Lettre*, p. 1279.

『フォンターヌ氏への手紙』を検証した結果、「進歩説」や「北の文学の優越性」については意見が異なるものの、二人の作家がともにメランコリーを称揚していたことが浮き彫りになった。後のロマン主義における主要なテーマとなるメランコリーへの傾倒を両者が共有していたという事実は、新しい文学の模索という文脈において、両者の方向性が必ずしも対立していたわけではないことを示している。シャトーブリアンが辛辣な批判のあと、突如として和解を申し出たのは、一度は政治的な理由からスタール夫人を攻撃したものの、大型新人作家のプロモーションという目的が達成された後は争う理由がなくなった上に、お互い作家として尊敬し合うようになったためだと考えられる。両者がその後、ロマン主義の発展においてどのような役割を果たしたかという問題については、稿をあらためたい。

(大阪大学大学院博士後期課程在学中)